



土岐市
TEL
FAX
メールアドレス
所
発行責任者
発行日
題

教育研究所
0572-54-1111 (内371)
0572-55-6310
kyoiku@city.toki.lg.jp
No.549
所長 長谷川 広和
令和2年1月10日
山田 恭正 教育長



『サンタとはな組 (年長)』
撮影者 土岐津小学校附属幼稚園
林 奨司 園長先生



教育環境の整備・充実

土岐市教育研究所長 長谷川 広和

下校時の子どもたちは、登校時とは違う表情をみせます。甲高い声で楽しそうに仲間と談笑する姿に、学校での楽しい出来事や充実した生活を想像します。「アップル」と英単語の発音のやりとりをする小学生の姿に、先生方の努力で、小学校外国語活動が楽しい教科として定着していることを感じます。先日は、横断歩道で停止した車に深々とお礼の頭を下げる子どもに出会いました。どんな環境で育つとこんな行為ができる子になるのか、考えさせられました。

現在、各学校のエアコン設置が進み、来年度からは真夏日でも快適な空間で授業ができます。小学校には、各校10台のタブレットPCが整備され、子どもたちがPCを活用して、リアルタイムで情報を入手して活用し、PCを囲んで協同して学ぶ姿が生まれています。子どもを育てるうえで、環境が大きな役割を果たしていることを実感します。

学校には、風が吹いています。匂いがあります。それは、子どもと教職員だけでなく、地域や保護者、何年にもわたる学校の歴史のなかで培われてきたものです。広島大学の町田宗鳳名誉教授は「それぞれの家庭には、特有の空気が流れ、子どもは

その空気を20年近く吸いながら育ちます。その間に形成された人格は可逆的といっていいほど決定的なものです。家庭教育の本質は目に見えない空気にあります。学校も然り。勉強に励みたくなる空気もあれば、将来夢がもてず、つつい弱いものをいじめたくなる空気もあります。学校がどんな空気を醸し出すかは、構成員全員の意識の持ち方によってかわるのです。」と語っています。

教室で仲間と顔を付き合わせ、わからないことを仲間に素直に「教えて。」と言って学び合う姿。恥ずかしさも乗り越え、曲想を体全体で表現しながら、仲間と音楽を楽しむ姿。仲間の意見に耳を傾け、発言に込められた意図や思いを受け止め、学級全員が頷いて共感し合う姿。ドキドキしながら英語で発表した時、仲間から「グッジョブ。」と認められ、「サンキュー」と笑顔で応える姿など、今年度も教室から滲み出る『人との絆の中で育ち合う』素敵な風・空気にたくさん出会うことができました。先生方の毎日の子どもたちとの豊かな関わりに感謝するとともに、『夢と絆』という「風」を子どもたちに送り続けていきたいと思ひます。

プログラミング教育指導者養成講座で学んだこと

土岐市立泉小学校 脇田 泰教

1 これからの子どもたちが生きていく社会

経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会（ソサエティ）」。これが、これからの子どもたちが生きていくことになる社会。高齢化が進み、急激な人口の減少、またAIやIoTによる高度化・効率化が図られ、産業構造の劇的な変化が予想されている。つまり、コンピュータやネットワーク無しには成り立たない社会であり、コンピュータそのものの特性を理解し、適切に活用することが求められる社会である。



2 現状とプログラミング教育必修化の背景

現在、Web エンジニアをはじめとする IT 人材の不足が深刻化しており、情報技術を十分に活用しきれず、このままでは情報機器を消費するだけになってしまうことが危惧されている。そこで、小学校からプログラミング教育を行い、「コンピュータを受け身ではなく、積極的に活用する力」や「プログラミング的思考（論理的思考力）」を養うことを目的に必修化された。

3 研修から学んだこと

私自身もこの研修を受ける前はプログラミング教育という言葉は聞いたことはあるが、どのような教材を使い、何を教えていくのかなど分からないことだらけで正直不安しかなかった。しかし、この講座を受け、プログラミング教育はあくまで情報教育の一つであること、どのような教材があり、どう実践していくのかなどを学ぶことができた。その中から特に大切だと思ったことが3つある。

1つ目として、「プログラミング教育は、プログラミング的思考を養うものであり、プログラミング技能を教えるものではない」ということである。

今までの教科の授業でも行われてきた物事を論理的に考える力を養う手段であった、計算式や実験などの代わりに、パソコンやタブレット、アンブレラド教材を用いるというだけである。確かに、各教科で確立されている教え方の中にそれらを取り入れ、新しい教え方を見出していくことは難しいことではあるが、手段の一つであるという捉え方ができたことで気持ちが少し和らいだ。

2つ目として、「正解への道筋は、無限にある」ことである。子どもの発想はとても豊かで、時に私が思いもよらないことを考え付く。例えば部屋の照明の節電方法について考えたとき、ある子どもは人感センサーを用いて人の気配を感知したら明かりが付くプログラムを考え、別の子どもは照度が一定より低くなったら明かりがつくプログラムを、また別の子どもは手をたたく音で明かりを点滅させるプログラムを組むなど、部屋の照明の節電方法1つとってもアプローチの仕方は様々であり、どれも正解である。このようにプログラミング教育は、子どもの自由な発想を生かすことができ、また私自身の視野も広げてくれる教育だと思う。

3つ目に、「教材研究の重要性」である。プログラミング教材として、様々な教具・教材が発売されている。それぞれに利点はあるものの、すべてを用いることは出来ない。そこで、教材を取捨選択し、その教材を効果的に活用するために、教材研究はこの先益々重要になってくる。教師が教材の魅力をも十分に理解し、子どもたちに分かりやすく提示するため、また、子どもたちの自由な発想の実現をサポートするためにも、教材研究はとても大切であると思う。

4 まとめ

私自身、まだ知らないことばかりである。他の先生方と協力、情報共有を行い、自分自身が教材の魅力や楽しさを見つけながら研鑽し、よりよい教育活動を行っていけるように努力していきたい。

岐阜県小学校外国語スタートアップ事業の取組について

土岐市立濃南小学校

1 はじめに

新教材“*We Can!*”“*Let's Try!*”を活用した移行期間を経て、2020年度から小学校学習指導要領「外国語」及び「外国語活動」が全面実施となる。特に、高学年の外国語が教科化されることを受け、評価の在り方について考える必要がある。そこで、新教材の活用方法並びに評価の在り方について学ぶことができる研修の場として、県の指定を受け取組を進めてきた。

2 昨年度までの取組（新教材の活用とその指導方法）

(1) インプットからアウトプットへ

たっぷりと英語を聞かせ、十分に慣れ親しんでからアウトプットへとつなげる。

(2) 使いながら身に付ける

指導から入らず、まずは使わせてみる。活動→指導→活動→指導…を繰り返し、間違いを減らしていく。

(3) 活動前後の指導

「何のためにこの活動をするのか」目的意識をもたせる。活動した結果、目的が達成したことを確認する。

3 今年度の主な取組

(1) 岐阜県版学習到達目標の理解

国際基準(CRFR)とCAN-DOリストの合体版となっており5領域の各段階におけるパフォーマンス課題が3つ程度示されていること、また、「話す(やりとり)」について「内容の適切さ」「表現の正確さ」の評価基準(ルーブリック)が示されていることについて、校内研修会で共通理解を図った。(研修会で参加者に配付された資料を参照)

(2) パフォーマンス課題による評価

「テスト」ではなく「パフォーマンスタイム」と称し、学期に1度実施した。

① 5年生のパフォーマンスタイム(8名)

<課題>あなたは教室で、イギリスから来たボブさんと初めて会いました。彼の好きな食べ物、好きな教科、好きなスポーツを尋ねてみましょう。

担任教師がボブさん役になり、一人ずつ別室にて評価した。実際のやり取りでは、初めて会った相手を知るために、指定された内容について正しい語順で質問をすることができた。また、多少の反応もすることができており、「内容の適切さ」「表現の正確さ」とともに全員が“B”評価であった。

② 6年生のパフォーマンスタイム(18名)

<課題>4月、授業で初めて会うオーストラリア出身のエミリーさんに自己紹介をします。その後にエミリーさんからの質問にも答えましょう。

この課題に類似した練習課題を3つ提示し、児童は「対話をする人」「iPadで録画をする人」の役割を交代しながら活動を行い、映像を見ながら互いにアドバイスをする活動を行った。エミリーさん役の担任教師が、児童のところへ行って一人ずつと課題について対話をし、その様子を班の児童にiPadで録画させた。実際のやり取りでは、初対面を考慮して、挨拶・自分の名前・趣味や好きなこと(物)について正しい語順で伝えることができた。さらに、相手からの質問に、単語レベルでも答えることができており、「内容の適切さ」「表現の正確さ」とともに全員が“B”評価であった。

(3) 検証

① 5年生のパフォーマンスタイム

別室で一人ずつ行ったことで、児童にとっては不安と緊張感のある“テスト”となった。ただ、やり取りを終えてすぐに、できていたことやよかった点を教師が本人に直接伝えることは、児童の学習改善につながったと考える。実際、時間内にRe-tryする児童もおり、最終的に全員が“B”評価達成となった。

② 6年生のパフォーマンスタイム

授業で行っている活動と変わらないことから、児童への負担感は全くなかったと言える。事後に映像を見ながら評価をする際、何度も見直すことができるので、教師は自信をもって判断し児童向けの評価シートも作成することができるが、非常に時間がかかるという点で教師の負担となる。また、その場で児童に評価シートを渡すことができないため、学習改善につながったとは言い難い。

4 今後に向けて

これまでは、授業観察や児童の振り返り用紙、成果物を見て評価をしてきた。今後「外国語」では、言語活動を通して「できた! わかった!」を児童に実感させ、「実際に使えているかどうか」を教師が見取り評価をすることとなる。児童にとって学習改善(次に何を頑張ればよい)につながる評価の在り方を、今後も職員一丸となって追究していきたい。



<6年 パフォーマンスタイムの様子>

自己を見つめ、仲間と共によりよい生き方を求める生徒の育成 ～『仲間と共に自己理解や価値理解を深め、自己を見つめる授業づくり～

土岐市立駄知中学校

本校では「自己を見つめ、仲間と共によりよい生き方を求める生徒の育成」を研究主題とし、道徳科の授業を要とした授業づくりを進めています。このような生徒を育成していくためには、「自分の考えをもち、仲間に伝える力を育てること。」さらに、「仲間と交流する中で自分の考えを深め、確かにする力や自己をより深く見つめる力を育てること」が大切だと考えています。そこで、道徳科の授業では、下記のことを実践しています。

1. 多様な読み物教材に応じた指導過程の工夫
2. 考え方や感じ方を深めるために「考え、議論する」指導の工夫
3. 自己を深く見つめるための指導の工夫

1 多様な読み物教材に応じた指導過程の工夫

教材を「人間理解&価値理解」「人間理解のみ」「価値理解のみ」「その他」の4つの型に分類し、それに応じた授業展開を行っています。これにより、何を考えさせたいのかが明確になり、生徒の反応をえがくことができるとともに、深めるための補助発問の工夫にもつながっています。

2 考え方や感じ方を深めるために「考え、議論する」指導の工夫

手立てとして、班交流や役割演技（二重自我法）を取り入れた授業を行っています。

本校では、岐阜聖徳学園大学の河合宣昌先生にアドバイザーとして来ていただき、多様な考え方をするための授業づくりについて教えていただいています。



その中で、二重自我法を取り入れ、**〈考え、議論する道徳とは〉**た授業も教えていただきました。班交流や役割演技を行うことで、仲間の発言に対して楽に問

いかけることや、仲間の考えをより深く理解することができています。



〈役割演技（二重自我法）〉

3 自己を深く見つめるための指導の工夫

価値に関わるキーワードを示し、自己の見つめ方の視点（「これまでは～」、「～を学んで、～を聞いて」、「～と思った。～と感じた。」）を位置付けています。この書き方にしたことで、生徒の気持ちの変容が分かるようになってきています。

ここまでの実践から、自分の思ってもいなかった考え方を、これまで以上に仲間から取り入れることができるようになりました。その結果、自己を深く見つめ、ものごとを多面的・多角的に考えることができ、これからの生き方について、考えを深めることのできる生徒が増えました。今後、さらに自己を見つめるための指導の工夫や多面的・多角的に考えさせるための工夫について追求していきます。

また、本校では、授業づくりだけでなく、「1家庭1ボランティア」の活動も行っています。ボランティアに参加することで、自分が誰かの役に立つことができたという達成感を感じている生徒が多く、ボランティアをやって良かったと感じている生徒が100%という結果が得られました。学校教育で培った道徳性を一層育むために、家庭や地域と連携を図り、1家庭1ボランティアの取組をさらに進めていきます。

令和元年度 下石小学校の実践報告

学力向上企画委員 下石小学校 山内 舞華

《研究主題》

学ぶ楽しさを味わい、進んで考える子どもの育成

～ 仲間との対話を通して、考えを広め深める算数科授業の在り方 ～

1 学習集団として考えを発展させ、理解を深める対話活動

「本時のねらい」の達成のために、教師が講じる手立ての一つが全体追究における学び合う場を組織することであると考えた。3年生算数の「ぼうグラフと表」では、本時のねらいである「二次元の表のよさに気づき、資料の特徴や全体の傾向を読み取ることができる」姿に到達するために、全体交流でハンドサインを用いながら意図的指名を行った。表から分かることを仲間の発言にかかわらせながら自分の考えを伝え、多くの意見を出し合った。【写真1】そこで、教師が「表を1つにまとめるとどんなよさがありますか」と発問した。その問いにより、児童は二次元の表の合計欄に着目し、表の工夫を見つけることができた。



【写真1】

全体交流を大切にしたいという背景には、すべての児童を大切にしたいという私たちの願いがある。学びは一人ずつ違うという立場に立ち、個人追究や全体追究を組織することによって、深い学びを生み出し、「本時のねらい」に到達させることができると考えている。

2 主体的な学びを生み出す事象提示と課題設定

1年生算数の「かさくらべ」の実践を基に述べる。第2時では、実物のペットボトルを見せながら「どちらがどれだけ多く入るか」と問い、一人一人に予想を立てさせる。【写真2】ある児童が第1時のくらべ方では「どれだけ」を測ることができないことに気づき、そこで教師は「前の学習を思い出そう」と既習事項の掲示物を示した。【写真3】「長さくらべ」「広さくらべ」の学習を思い出した児童は「いくつ分くらべをするとよさそう」「同じ大きさのカップを使おう」と見通しをもった。そして、子どもたちの言葉で本時の課題をつくり、「カップをつかってどちらがどれだけおおくみずがはいるかくらべよう」と課題化した。



【写真2】

このように、主体的な学びを生み出すためには課題設定が重要であると考え、実践を行ってきた。本校では、児童が疑問を抱き、自ら問題を発見できるような事象提示を行うことで、問題意識から必然のある課題を設定することを大切にしている。



【写真3】

3 来年度の研究に向けて

自ら進んで追究する主体的な学びが少しずつ実現できている。来年度は対話活動に重点を置き、自分と仲間の考えを比べ、自らの思考を深められる指導の在り方について探っていきたい。

令和元年度 肥田中学校の実践報告

<研究主題>

学びに向かう力を育む、対話的な授業づくり

本年度の肥田中学校では、自分の考えを深めたり広げたりするための対話活動に重点を置いて研究を行った。授業を組み立てる教師が、本時獲得したい学習内容やねらいに合わせて「いつ」「どこで」「どのような」交流の場を設定するのかを明確にもち、授業を行うことで、生徒がより主体的に学んでいくと考え、実践した。

1 仲間との対話活動の良さを実感できる授業づくり

外国語科の「2年生 Lesson3 The Ogasawara Island」の実践から述べる。これまで、生徒同士の交流の意図として、「考えを順序立てて相手に伝える」「違う考えに触れ、学びを深める」など、ねらいに合わせて設定してきた。本時では、自分の提案をより具体的に相手に伝えるために「仲間からの質問に答える中で、自分の考えを深める」交流を実践した。前時までに作った自分の提案文を相手に伝えた後、相手は what や where、how などを使って即興的に質問を行う。その質問に答えることで、今まで自分にはなかった新しい視点や足りなかった説明に気づき、提案文をさらに充実させるよう考えを深めるきっかけとした【写真1】。交流後に、仲間からの質問に対して答えた内容をメモし、最後には提案文を修正する姿も見られたことから、生徒にとって仲間と関わることの必然性を感じられる活動であったと考える。また、この交流では、相手の提案を聞きながら内容を理解し、質問を考えて伝えることを、英語のコミュニケーションツールとして行った。質問をする側もされる側も即興的に英文を考えて伝える活動を、生徒は既習内容を活用しながら取り組んだ。その中で、即興性を大切に外国語科のねらいの達成と、質問文例が示されたヒントカードの提示などの指導補助のバランスの難しさについて、今後も生徒の実態に合わせてながら授業計画を行っていく。



【写真1】

2 主体的に課題解決に向かう話し合い活動の位置付け

保健体育科の「2年男子 バレー」の実践から述べる。対話活動として「前半・試合間・後半」にグループ会を設定し、課題追究につなげた。中でも、前半グループ会では、教師から提示された本時の目指す姿と今の自分たちのチームの実態を照らし合わせ、グループに合わせた課題を設定した【写真2】。課題解決に向けたグループ練習の方法も、生徒同士が意見を自分から提案し合い、実践していくことでより主体的に学習を進めることができた。体育の授業における対話活動として、練習中や試合中の声掛けも挙げられる。課題解決に向けた練習時間の中で、何度も相談しながら練習メニューをアレンジするグループが多くみられた。自分たちで考えて行った練習内容だからこそ、生徒はより良い方法を探究し、主体的に取り組むことができたと考える。



【写真2】

この実践における課題は、教師の出場の見極めである。グループの課題と練習の意図を理解したうえで、どのような声掛けを行うことが生徒の思考をさらに深めることができるのか、今後もさらに実践していく。

3 来年度の研究に向けて

各教科で対話的な授業づくりを行ったことにより、自分の考えを仲間に伝えることへの苦手意識の改善につながった。今後も対話的な授業づくりを進めていくことが、生徒の見方・考え方や技能を広め、深め、学力の向上につながることを教師側と生徒側の両面でさらに検証し続けていく。

子どもの考える力や発想を大切に

泉小学校附属幼稚園 教諭 江崎 直子

運動会后、友達と一緒に同じ目的をもって遊ぶ楽しさや試行錯誤しながら遊ぶおもしろさ、また異年齢との関わりをより深めていけるようにと願い、5歳児が様々なお店屋さんを開く『いずみっこ祭り』を行った。

事前に子ども達とどんなお店をやりたいかを考え、話し合った結果、私のクラスでは『お化け屋敷』と『どんぐり転がし』の二つに決まった。その後、子ども達でやりたいお店の担当を決め、作るものや材料、遊び方など考えを出し合いながら進めていった。

『お化け屋敷』では段ボールをつなげておぼけのトンネルを作ることになった。作り始めるとトンネルが傾いて倒れてしまうことに気付き、子ども達は困った様子で教師に相談に来た。「どうしたら倒れないようにできるかな？」という教師の問

い掛けに、子ども達は「手で支えている。」「何かをくっつけて支えにする。」などの意見を出した。それを聞いていた子が「(支えに)牛乳パックを付けるのは？」と提案した。教師は子ども達の話聞きながら、「いいことを考えたね。どうなるか楽しみ。」と言葉を掛けて見守った。子ども達は牛乳パックで支柱を作り、その工夫でトンネルは倒れなくなった。『いずみっこ祭り』でもトンネルは倒れることがなく、子ども達は満足そうであった。自分達で意見を出し合い、試行錯誤しながら作ったからこそ、満足感や充実感が味わえたのではないかと考える。

これからも、子どもの思いに寄り添い、発想を大切に一緒に考え、試行錯誤を繰り返しながら遊びを創りあげていく経験を大切にしていきたい。

チーム学校でめざす「濃南」だからできる学校づくり

濃南中学校 教諭 林 裕二

教員となって四半世紀。昨年度より勤務している濃南中学校は、全校生徒32名（3年生7名・2年生20名・1年生5名）であり、土岐市はもとより、この地区においても小さな規模の学校です。少ない人数ならではの（他校ではできないような）経験をする事ができます。しかし、私たちにとってレアなことであっても濃南の生徒にとっては、「当たり前なこと」として前向きに受け止めています。

ある時、3年生の生徒が「研究授業などで、濃南中に来てくださった他校の先生やお客さんに『あなたたちは、7人しかいないから大変ね』とよく言われます。そんな時、私は『人数が少なくても、私たちは7人だから大丈夫です。』と答えています。」と明るく、そして誇らしげに語っていました。3年生以上に少ない1年生の生徒は、市内の学校でいえば、一班程度の人数で合唱に取り組むこととなります。12月に開催した、合唱祭では、彼らは、堂々と歌い切りました。ただ、合唱祭当日の舞台に立つまでの道程は、決して平坦なものではありませんでした。少ない人数で歌うことの重圧に押しつぶされそうな彼らを、学級担任は、認め・励まし・支え続けてきました。生徒たちも、不安を払しょくしようと練習に励みました。こうして迎えた本番は、全校の戦陣を切って舞台に立ち、精一杯歌い切りました。当日参観された親さんから、子どもたちが無事に発表を終えた安堵感と、少ない人数で合唱に取り組ませることの

是非について、思いを話しに来てくださる親さんもみえました。確かに、あ的人数で舞台に立ち、歌っているわが子を見たら、「学級づくりの一環で取り組んでいる意義あるもの」ということは理解できても、「酷なことをさせている。」といった思いをもたれることも、十分に理解できました。

とは言え、1年生の生徒たちが、どんな思いでいるのかが重要なわけです。合唱後の振り返りの場で、全員が「来年もこの仲間と一緒に、私たちの合唱を歌いたい。」「3年生みたいに、感動させられるような合唱を自分たちもつくりたい。」と学級担任に訴えました。合唱祭を通して、あれだけ歌うことへの不安を抱えていた生徒たちの意識が変わり、心の面での成長も見られました。

令和2年度より、小中一貫校として、新たな一歩を歩みだす本校ですが、濃南地区の児童・生徒、私たち教師、親さん、地域の皆さんが一丸となって、「濃南」だからできる学校をめざしていきます。



全員でつくる濃南中の合唱

「〇〇さん、おはようございます。」

濃南小学校 校長 篠原 徹

朝の登校指導で立っていると、あいさつの声が変わられます。元気よく「おはようございます！」と言う子もいれば、うつむき加減で口の中でモゴモゴと言う子もいます。その中に、「〇〇さん、おはよう。」と名前をつけて言う子がいることに気が付きました。私に対しては、「校長先生、おはようございます。」と言います。

早朝の気温が氷点下なのにもかかわらず、これなんとも言えずあたたかい気持ちにさせてくれるのです。一日のスタートから不思議と気分がよい。「名前を付けてあいさつ」は、最強の「ほかほか言葉」ではないかと思うほどです。これは、濃南小で初めて経験することで、名前をつけてあいさつされるのがこんなに気持ちのよいことだと

いうことを、私は子どもたちから教わりました。

そこで、全校の子ども達に同じようによい気分を味わってほしいと思い、登校してくる子ども達一人一人に「〇〇さん、おはよう。」と名前を付けてあいさつすることにしました。

ところが、教室で毎日顔を合わせるわけでもない子ども達は、顔は識別できても名前は咄嗟に出てきません。一日一人ずつ顔と名前が一致する子を増やしていくつもりが、覚える端から最初に覚えた子を忘れていたといった体たらく。

それでも、1年かかってでも、すべての子ども達に「〇〇さん、おはよう。／こんにちは。」と言えるよう、これだけはやり遂げようと頑張っています。

掲 示 板

～おめでとうございます～

◇令和元年度 学校安全文部科学大臣表彰

《学校安全ボランティア活動奨励賞》下石町シニアクラブ見守り隊

◇令和元年度 第60回県学校歯科保健優良校表彰

【大規模校の部】《県一位》土岐津小学校

【中規模校の部】《優良校》妻木小学校

【歯科保健推進校】《歯科保健推進校》肥田小学校

◇令和元年度 東濃地区学校図書館教育賞

《奨励賞》泉小学校

◇令和元年度 岐阜県学校保健会表彰

【個人の部（養護教諭）】水野 智恵子 養護教諭（土岐津中学校）

【団体の部】土岐市栄養士部会

◇令和元年度 学校環境衛生活動優良校表彰

【中学校・義務教育学校の部】《準優良校》土岐津中学校



〈文部科学大臣表彰報告会〉



〈学校歯科保健優良校表彰報告会〉